

季刊マーメイド

逗子市立図書館報

第20号

2019年7月1日発行

逗子市立図書館

逗子市逗子 4-2-10

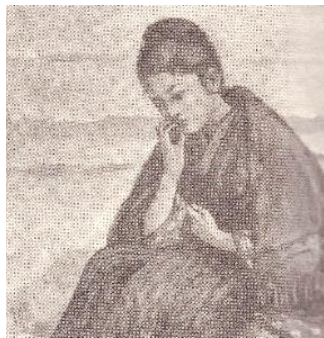
046(871)5998

<https://www.library.city.zushi.lg.jp>

[y.zushi.lg.jp](https://www.library.city.zushi.lg.jp)

『不如帰』と横浜正金銀行①

—『不如帰』編—



『不如帰』初版の口絵に描かれた
浪子像（黒田清輝画）
『名著複刻全集近代文学館[26]』
（日本近代文学館）より

小説『不如帰』について

徳富蘆花の『不如帰』は、浪子と武男の悲恋を軸とし、明治31～32（1898～1899）年にかけて掲載した新聞小説です。ヒロインの浪子が病氣のため転地療養した地として描かれた逗子は、風光明媚な保養地として一躍有名になりました。

蘆花は明治31（1898）年夏に逗子の柳屋に滞在していた折、たまたま福家安定（ふけやすさだ）陸軍中佐の夫人・福家安子と同宿しました。福家中佐は日清戦争の戦地ですでに病死していましたが、大山巖（おおよまいわお）陸軍大将に副官として仕えた人物でした。福家中佐は大山大将の腹心とも言われており、夫人も大山家の内情をよく知っていました。福家夫人は蘆花に、大山家の長女・信子について、三島弥太郎（みしまやたろう）と結婚してまもなく結核にかかったこと、その後離縁されて亡くなったことを話しました。蘆花はこれを聞いて、即座に小説にする事を思いついたということです。

後に蘆花は『不如帰』第百版の序文「第百版不如帰の巻首に」（明治42（1909）年）の中で、「話の骨に勝手な肉をつけて」小説を書き上げた」と述懐し、浪子と武男の話は事実と異なる作り話であることを強調しています。

大山家と三島家

大山家と三島家は同じ薩摩の出身ということもあり、もともと親しい行き来があったようです。大山巖は明治陸軍の実力者で、西郷隆盛・従道（じゅうどう）／つぐみち兄弟とは従兄弟の関係です。三島弥太郎の父・通庸（みちつね）は、県令や警視総監を歴任し、勲功により華族に列せられ子爵となりました。

大山信子と三島弥太郎の結婚の媒酌人は西郷従道がつとめました。小説『不如帰』には、従道夫妻を思わせる加藤夫妻が登場します。



大山巖
(1842-1916)
国立国会図書館 HP
「近代日本人の肖像」より

信子は幼少の頃実母を亡くし、継母・捨松（すてまつ）を迎えています。捨松は、明治4（1871）年の岩倉使節団の一員として、津田梅子らと共に渡米した日本初の女子留学生の一人です。後に大山巖と結婚し、鹿鳴館では諸国との外交活動を担ったため「鹿鳴館の華」と呼ばれました。



大山捨松
(1860-1919)
国立国会図書館 HP
「近代日本人の肖像」より

弥太郎は明治17（1884）年、17歳の時に渡米し、農政経済学を学びました。留学中に父・通庸が急逝しました。弥太郎は一時帰国しますが、再び渡米して勉強を続けました。しかし、自身の病気の為、明治25（1892）年夏に帰国しました。帰国後、信子の母・捨松とも親しい津田梅子の仲介により信子との縁談がすすめられ、翌年春に二人は祝福されつつ結婚しました。



三島弥太郎
(1867-1919)
国立国会図書館 HP
「近代日本人の肖像」より

信子の療養

ところが信子は、結婚後わずか2ヶ月で結核を発症してしまいます。1ヶ月ほど三島家で療養しましたが、快方に向かわず実家に戻りました。小説の浪子は逗子に転地しますが、実在の信子が滞在したのは、父・巖の従妹の嫁ぎ先である鮫島員規（さめじまかずのり）海軍大佐の横須賀の別邸でした。鮫島大佐は当時、横須賀鎮守府参謀長の任にありました。弥太郎は信子を見舞いにたびたび横須賀を訪れたようです。弥太郎を始め、周囲の人々の回復への願いにもかかわらず、信子の病気は悪化するばかりでした。離縁話が持ちこまれ、結婚2年後の明治28（1895）年、二人の離婚が正式に成立しました。



三島弥太郎の遺品の中から見つかったという大山信子の肖像写真（『不如帰－逗子再発見－』より）

小説では武男の母の川島夫人は冷酷な姑として描かれています。弥太郎の子の通陽（みちはる）氏は、「実際の祖母は決してあんな冷酷一点張りの悪婦でなかった事は、皆が証明する所」と述べています。信子は東京の大山家の離れに移って療養を続けましたが、明治29（1896）年、20歳の若さで亡くなりました。

《軍港都市横須賀の発展》

横須賀は、明治17年に横浜から鎮守府が移されたのを機に多くの軍の関係施設や人が集まり、軍港都市としての発展を遂げました。当時の海軍大臣・西郷従道と陸軍大臣・大山巖は横須賀までの鉄道建設の必要性を訴え、明治22年には横須賀線が開通しました。軍人たちが居住する官舎や持ち家も多く建てられ、住宅地も広がっていきました。

弥太郎・弥彦兄弟と横浜正金銀行

弥太郎は、再婚して新しい家庭を築きました。弥太郎は貴族院議員を務めながら国際金融に従事し、横浜正金銀行頭取や日銀総裁を歴任しました。

弥太郎には20歳近く年下の弟・弥彦(やひこ)がいました。弥彦は運動方面で「超万能選手」でした。明治45(1912)年のストックホルム五輪には陸上短距離走の選手として、マラソンの金栗四三(かなぐりしそ)と共に日本人で初めて参加しました。



弥彦は五輪が終わると世界を歴訪し、翌年(大正2(1913)年)2月に帰国、大学を卒業した後、横浜正金銀行本店に入行しました。弥彦は海外勤務が多く、サンフランシスコを皮切りにニューヨーク、ロンドン、北京、バタビヤ等、欧米やアジア各国にある横浜正金銀行の支店に赴任し、昭和18(1943)年に退職しました。

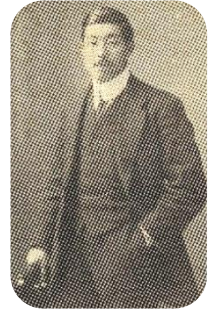
《三島弥彦とスポーツ》

弥彦は野球・陸上・ボート・ホッケー・ラグビー・テニス・水泳・ラクロス・柔道・相撲からスキー・スケートまであらゆる競技に取り組み、相当の実績を上げました。湘南の海で波乗りや遠泳も楽しんでいました。明治41年8月の日記には、小坪の岬で替ったという記述があります。

三島弥彦

(1886-1954)

『日本初の
オリンピック
代表選手
三島弥彦』
より



〈主な参考資料〉

『柳屋の独歩・蘆花』木村彦三郎著 石渡喜市

(P 910 キ / 94.Z キ)

『不如帰—小説—改版』徳富蘆花作 岩波書店(ZY F ト)

『市制40周年記念』不如帰—逗子再発見—

市制40周年記念事業実行委員会 (29.Z シ / P 291.3 シ)

『大山巖 3』児島襄著 文芸春秋 (S 289.1 オ)

『鹿鳴館の貴婦人 大山捨松—日本初的女子留学生—』

久野明子著 中央公論社 (289.1 オ)

『三島弥太郎関係文書』

尚友倶楽部・季武嘉也編 芙蓉書房出版 (28.Z ミ)

『三島和歌子覚書』

尚友倶楽部史料調査室・内藤一成編

芙蓉書房出版 (28.Z ミ)

『日本初のオリンピック代表選手三島弥彦

—伝記と史料—』

尚友倶楽部史料調査室・内藤一成・長谷川怜編

芙蓉書房出版 (782.3 ニ)

『新横須賀市史 別編文化遺産』横須賀市編

横須賀市 (21.S ヨ ベ-1)

『横浜正金銀行』神奈川県立歴史博物館編

神奈川県立歴史博物館 (33.A ヨ)